

重度肢体不自由児の表出行動における理解と支援

○黒江 純子

(和歌山県立紀伊コスモス支援学校)

江田 裕介

(和歌山大学教育学部教授)

KEY WORDS: 重度肢体不自由児・コミュニケーション・表出行動

【目的】特別支援学校の教員が、重度肢体不自由児とのコミュニケーションにおいて、子どもの意思や感情をどのように捉え、支援を行っているかを検証するため、調査を実施した。言語の表現が乏しく、身体の運動にも制限がある障害の重い子どもに対して、①表情や行動を捉える視点と、②表出行動の意味を解釈する手がかり、及び③コミュニケーションを促す支援について、教員による関わり方の特徴や個人差を明らかにする。これらの調査結果の分析を通して、重度肢体不自由児のコミュニケーションにおける効果的な支援の在り方を考察することを目的とする。

【方法】(1)アンケート調査：2015年5月にX県内のY特別支援学校1校の肢体不自由学級担当の教員24名を調査対象とし、アンケート調査を実施した。調査は自由記述とし、内容は以下の5点である。

- ①教員の勤務年数
 - ②重度肢体不自由児の指導経験年数
 - ③どのような行動を表出行動として捉えるか(表出行動)
 - ④表出行動を解釈する際どのような情報を手がかりに用いるか(解釈)
 - ⑤表出を促すための支援方法(支援)
- (2)相関分析:教員としての勤務年数と重度肢体不自由児の指導経験年数の「年数の要素」は、子どもの表出行動を捉える視点や解釈に用いる手がかり、支援の手立ての豊富さといった「表出理解の3つの要素」とどのように関係しているか、年数と自由記述の回答数との相関を分析する。

(3)KJ法による観点の抽出:「表出理解の3つの要素」における回答内容をKJ法(川喜田,1986)によるグループ分けの手法を用いて質的分析を行う。分類を行う際、池田・三沢(2012)の研究を参考とし、大学院生5名の評定者によって観点を整理する。

【結果】(1)アンケート調査：20名から回答を得た。回答率は83%であった。
 (2)相関分析:表出行動を捉える視点と解釈の手がかりに関する回答数は、重度肢体不自由児の指導経験年数との間に正の相関がみられた(表1)。「表出理解の3つの要素」における要素間にも正の相関がみられた(表2)。

表1『年数の要素』と『表出理解の3つの要素』の相関(r)

	表出行動	解釈	支援
勤務年数	0.479*	0.368ns	0.358ns
指導経験年数	0.628**	0.600**	0.364ns

ns p>.10 † .10>p>.05 * p<.05 ** p<.01

表2『表出理解の3つの要素』の各要素間の相関(r)

	表出行動	解釈	支援
表出行動	—	0.619**	0.614*
解釈		—	0.711**
支援			—

ns p>.10 † .10>p>.05 * p<.05 ** p<.01

(3)KJ法:①表出行動:教員は子どもの表出行動を(身体

の様子)〈音声と言語活動〉〈主体的・目的的动作〉〈生理状態〉の4つの観点から捉えていた(表3)。(身体の様子)の中でも、特に「顔」の「表情」や「目」に注目していることが明らかになった。

表3 表出行動のカテゴリー ()内は集合枚数

大カテゴリー	小カテゴリー
身体の様子(114)	顔(70) 顔以外(44)
音声と言語活動(35)	発声の様子(21)言語の表出(14)
主体的・目的的动作(30)	意図的な動作(20)感情の表出(8) 習慣的な行動・くせ(2)
生理状態(24)	生命兆候(19)日常生活動作(5)

②解釈:表出行動の意味を考える際、『目の前で起こっている事象』だけではなく『背景情報』を多く利用していることが示された(表4)。

表4 解釈のカテゴリー ()内は集合枚数

大カテゴリー	小カテゴリー
背景情報(84)	日常生活の様子(35)興味・関心・意欲(31)個人の特性・とりまく環境(6)経験(6)関係性(4)家庭からの情報(2)
目の前の事象(9)	行動表出時の環境や状況(9)
表出行動(14)	発声・視線の向き等の表出行動(14)

③支援:表出を促す支援では、『能動的な発信を促す支援』と『関わり手の姿勢・態度・関わり方』の両方を重視していることが明らかとなった(表5)。

表5 支援のカテゴリー ()内は集合枚数

大カテゴリー	小カテゴリー
能動的な発信を促す支援(58)	言語・身振り(16)支援機器(15)視覚支援(15)ツールの使用(5)具体物(3)表出行動(4)
関わり手の姿勢・態度・関わり方(48)	意味づけ・かえす(17)子どもにわかりやすい関わり方(6)意欲を高める関わり方(3)時間的な支援(2)共感・共有(20)
安心できる関係(1)	安心できる存在になる(1)

【考察】

表出行動を捉える視点と、解釈の手がかり、及び支援の手だてという3つの要素は、相互に影響し合い、経験年数の要素とも関連していた。障害が重い子どものわずかな表現を的確に捉えるためには、幅広い視点を持ち、子どもの反応によって柔軟に対応していく姿勢が、重度・重複障害児とのコミュニケーションの成立には欠かせない。そのため具体的な視点として本研究で示した表出行動、解釈、支援の観点が役立つと考える。

【文献】

1. 池田浩・三沢良(2012):失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発—.教育心理学研究,60,367-379.
2. 川喜田二郎(1986):KJ法—混沌をして語らしめる.中央公論社,195-200.

(KUROE Junko, EDA Yusuke)